伊勢物語古筆拍 全

惟清抄

伊地知文庫
文庫20
393

伊地知氏書冊

伊勢物語者在原中將之所作也或以為伊
勢之作也世存與說未決可否蓋所謂
中將而所述伊勢乎大率雖賊好色事
玩味之則有含仁者有壞義者有存礼
者有感時憂世者有詠飛花落葉而
觀無常者其歸不一耳愚見千前肖
問于後釋而辨之者既已詳矣古來詞人
欲士唯以情艷論之猶如唐王建宮詞之
類是可忍乎今茲大永二載夏五月吾
逍遙老人講冊書以醫鼓後學矣鉅卿

文庫20
393

高客戸屨日滿如腐儒亦遂其未席以
聞得未曾聞厥談麈之妙言淺而義深理
近旨遠至君錦其心綉其口以含蓄不盡
之意於言外則非義精仁熟輙難貫
通鳥津千載之下雖曰令中將而復生
亦靡歟衽間言可尚矣弔雖不敏其盈
耳者書十之八九瞰白屢就老人以糾謬所謂
貧兒暴富也吁弔已老矣豈衰燭
夜行平所希者未子弟讀之而可知倭
歌之為道不可周詩也苟有知則必曰孔

孟業平易地皆然不亦悅乎林鐘庚
寅金笠光大夫拾遺宣賢自序

△伊勢物語

此書大概ハ古今伊勢物語後撰を由来ふるし書也云々
小学ハ三物ん古今の次ニ伊勢物語にて後撰とある故ハむ古ハ書ハ三事
と申さハ二条家にハ三代集の伝授ハ先此伊勢物語を初同りよ
む事と此伊勢物語ハ知顕抄とて三帖あり先ちなき事なり是之人
十帖の抄ハ古注といふこと又これあまき事なる知顕抄も彼身ハし
作り十帖の抄ハ未被見と此伊勢物語の秘事ハこれ古注の之とあるといふ作り
事也後成恩寺の抄にも古注の之作者なきハ此事を是用て紀生
様して被載てもて此事也二条家にもれ古注をもちて用ひてき
かすり事ありてみえの親ふくあり去ると申て古注をも
ても口伝ともふんとみてきり世作りとおもいけり古注の説と
なしりあけをしてらむなり
題号の事伊勢の二字ハおとこ女といふ字別あまハ男女此物語
いふ説あり十ちなき事也定家卿書ニもあり中に奥ハ書をくり給
一本奥書よ

[illegible]
[illegible]

伴勢物語

とり抜書紙編すゝまんまつ題号の如きのふる事はこまきつ義
あり是を伴勢物語と号する事京極黄門の奥書にみえたり此の奥書云
抑伴勢物語相源古人説不同或曰在原中將自記云
固茲有謚退比興之問等 謚退といふこひおれなるといひ又
云のことにしてさりけるまことなと云て
早下してかけり數を云比興といふはけり真して俳諧の由にいつ類を云
賦比興のふりはあらしと
又云伴勢筆作也 或云生年十三初書 似彼家集文辭是故
号伴勢物語 伴勢ヶ家の集にいつまの御時にかゝるをんあほしや
まとまきあえけり此つ名称にたれにあやかけり人
さしてひかり此ヶ事ヶ此物語におかしひて
かけり筆勢彼家集の文辭に似たりと云
以此兩説案之更

難決定心中秘密身上興言他人推而難治
可謂其自書頭 常秘密といふそ事を云身上興言
と云興して無いふまいつ事を云 但
疑万葉古風之中多載撰集之頭 此物語に万葉
云等を 代に撰集の
のこと 仁和聖日之間粗記臨幸之儀 ゆり川の行幸乃
事をのこしたり
業平没してより
けるかに後の事也 此等事又不審伴勢家集其端
文辭偏以同也是又見先達旧記庶幾其辭
頭雨不知也 先達旧記とは伴勢ヶ旧記の文法を後人かみてそれさ
由をこひ称ふるに此物語乃辭にかけり頭
加之此物語名字非彼筆者何稱伴勢乎或

説云為狩使下向伊勢仍有此名其説又難信
始則載南京春日之詞春日の里にしるよしして狩にいにけりと云次又
注酒對夜月之思月やあらぬ春やむかしの春ならぬ冨士山之雪武蔵
野之煙凡非伊勢国事此事ハ習あり是等をとけんや多以為此物
語之肝心仍両説有不審古事只仰而可信
又或説後人以狩使改為此草子之端為時
伊勢物語之道理也伊勢狼藉奇怪也伊
行所為之不用之伊行世尊寺曩祖也建礼門院右京大夫父也

今師説に用るハ伊勢の物かたりと云ふ義なり右二説に伊勢ハ二字
に女と男とを云字訓あり男女のまじはりをかきて伊勢物語
と号すると云り伝ニ用ゆる也又此物語に十巻の注あり又知
顕集とて紀伝の注ありといふも皆まことにかけ一としてことわ
る事なし此等の注どもを後成卿見て皆證破して不被用

一 むかしおとこ　昔とハ太古を云近古をもいふ又むかしハおきなの
昔りとあらハむかしのおとこをいひ昔になりたる今の事をもむかしといふへし偽書也尚書古者
伏犠氏之王天下也とかくも古と云を上にかけむかしをとこといふ
業平也昔男と古注にかけて業平を昔男と云事といへる義

みちのくの　古今ニ河原の左大臣として入れり　融公の作也　誹也
に乱れそめにし我ならなくに　此歌をこそ乱れそめにし
と云心ハ是を今女に逢て小用きハ何をもて忍ふ絶よ心を乱し
て今乃逢ふ事ハ十分也しのふの乱れハ限なくまことゝいふ心緒
心そあらん我ならなくに我故ならてハあるまじきことゝ也此心
誰ゆへにか乱れ初にし我ならなくにと也是を云縁合の歌也と
せられし事毛詩の序の賦するに准すへきやとおもはれ
はなるやき　早速也章ニ章を書て後の章ニ返しするを云
ことやと　いやひをかへすとなり云て趣うたへんは當時にすゑを云之
河原左大臣也　定家ハ融也旅在中将誹幾先達如何と業
平の融公を先達として書かむと見て後も色さへ人ハかゝると云
心ならちのく此家を書に於ておもて此語とせん言此融伝領

二
昔男ありけり　ならの京ははなれ此京は人の家またさたまら
ざりける時にならの京と此京ハさかり時に先西京東京とひらいて後ニ東
京をとひらけり時に東京にもみち人の町并に定宅とれし有り
世人　定家ハ自筆ハ西をも本にまる世人とあり忠の筆ともに謹定

此世の人にの字を入てよむ也又世人としるく世の字をそへ
る京なる也立經ニ国人を国民とよむ類なるへし
其人形よりは心なん勝りたりける　世人にはまさりたると云容儀
いそいをそへて形よりは心なん勝るとさも世にすくれたるへきとこそ
独のみにもあらさりけらし　主ある人也
それを男打ちかなひて　勝りハ容貌乃字也好色ハ容貌人にすくれある也
うちものも業平の自辞なるへくもなくや
西ならわか　由りハ始めと濁也濁ハうたの處をおほしきり
おきもせす寝もせて　寝をせぬ處をそてあかして晝は
春の物とて長雨しのふり　似と云りあり絶はなきものを云心の似
うつ寄来たり

三
昔男ありけり　昔きなのはにほひけるを人入不見とはまつれ
気しきを
物ともなりけりや
おもひあらハ　帝小大臣心と見へ人なをあらはしてみ
も寝なん　ひしき物には袖をしつゝも　其心は方葉ニ也

ヒジキ藻　鹿尾菜　トモ書也

十 父はおとゝ人に父は女をこと人にあはせんとおもへるを母は業平
にあはせんとおもへり
父はなるを人にしてもなさ人をなさ人と云俗姓なさ人に
母なん後にたゞ國姓の中にも後代にたゞしさる事頼に母にあてな
ある人に何はせんとおもへり
はむこゝ○によりてをこせり
みよしの　この事は田面へかりの稱も差る方へ方と云ハそ
なるへんのひくそといふこゝろへ
我かこに　我かこにより事と鳴といふハ其ハそ本らなるまゝ事志をい
ひかわきまんとこ
人の國にて是　他國にて是かく好女は事厚しすといふ
十一 思ひあるなら　拾遺にも直解の事とみたり　はにハ業平は事と次
稿に古事又万葉の事なとをかくかく事あり　ほとハ事外とハ遥
に見たる事にもと云義へ我立敗てみわひまてわたるなといふ
十二 人のむを絶をぬきて　殊に作物語の説なるまハなさ事をかけるなり
國のうをふかゝめ雖も　人をかとてとて國の事にかゝ絶たる事

尺ちる事人　満ける人へ
むさしのは　は事はあるよりして　は説をいかれ事せりつまといはに
女は男をへまと云へ古今にハ事の親にへてうすりのとへて眺
中の事と次
十三 むさしのはとかきて　筆くさいふといふ心へむさしあふとと云
はれといふ國より歯いりせ付たる物を見まゝ号するへさぬ
さ気雅なといふる類へ
むさしのはちきうくる皆あふの縁へ方のことを次ふるも
ふれ同ぬもんかりしかりの事
此へいふ　とはうるさいと云何○は怨をなすを進退きも思ふる
女なりうる時にや人も死る物にてあるんと也
十四 中くに　中くに恋に死なすして何しんなるハせかくかいはなりこ
も成る事とかいこともはるなるまとともいはせの歌り今事物な
見れ也　又は命一年をすこしたる事物なるまハ恋に死なるまハ年をすす
こしたりしてあらし間になるにもなりたる事のをいりいちと
乃雅なり此をといふ義へ

後考 聽電

自筆 黄昏

孫息同人

也史記云 黄獅雄人注 索隱曰後 亦謂之 孫卿子者 遊漢宣帝 諱而已

さて稱うへきそ事を云也世間のあふなき事哉

田原郎と云文選注に説苑を引晋平公の時に九層の臺

を作る黄昏と諫めんとて呂をとらせて其上に

に郎の上をとらせぬる事をとらせると云平公曰ゆへ死きすると云黄昏

云れ死からは云の九層の臺を作て百姓を煩せ是甚死きす

なりと云平公の領解メ臺作る事を止さう文選注に平公を靈云

とし基子の術をすると云ものを孫息としうあらは故事撰縁の方にも

あらも成ましき事に云へうとひ其間しき事にあらも思はぬ命を

ふと云事にもあり面しきとおもり

物露は 電光朝露はあらたる物にいつり露は釣りをいく日新に浩て

のゝ新物之志也物露は浩ぬりても其めへしいりせの事なとはこの

見えしりましきと也

吹風に 今年の樣なり此もちらすしてあるべきを其事に樣なるにも

ぬりましきへきそ其事にはあるしあるとも人のしいるをかうしとも

其事の樣といつるか一重起していつる

りあに 經文に亦如畫水隨書隨合

行水と 前の奇にいつる物を礼集くらゆり 日月のゆくは止あれ

おとし思ひ又此めらまはすちる花さへかうしこまらとも

此事の神あくきと見るまはも何まも行てとい事をきうちる物

あこそへ 物語の作者の詞

思ひあるき 作をさ見すして始終を以あるく者の志ける事といつり

是うしうへ うしう色にとは重詞之をくなるいと云也是杜にさ

も由る限なし此花をうへをくなるいと云也是杜にさ

と云すは其へかも花こそちるとも根のうるしのは其間にさこ千

秋万歳らへしといつりの花なとうへうん時に此を以りしへし

幸うさうちまれ ちまれを糸なとみてまれるを云拾遺の辞なり

ある事也

あやめ 何やめ其糸をするにはなかれとしいつるあやめ我貴

まろ白なまはいくいつりまつかさうちまれをこせうるを謝しう

そ此こはぬきにまらひ此ちまれをしてこ由えまり我を罪

りかく狩をするとて雉を屋り

かさ 逢うこれ 詞うきをんりおいて此事をこれ撰其物をあへ返て

かしらに悪しき由さうて所しきと也

第六 岩木にあらず孫は　人非木石必有情

身よりきも一四二　六月の温氣の折蓑數にもなし秋は成あんと云

其人のかたへいなんを　業平のかたへゆんとすらなと云口吉也

久しくのかたへ紀家　りみちたん時ぶにあらせたきと早くかの付也

あるゆゑなりはちをあるゆゑや

秋けく　姫風吹きなん時にあらんといふうちをなすきを云木の葉ふ

里しくにとゝ深く成江へ縁にしらせてゝ秋ろ

しこゝりへをこせも　上にをこせたりとあまと云時屋ろにあらせ

屋也とて書付てをいく使あらん屋きと云てをくそきをとゝをこせたり

久しく思ふきとゝ　紀由屋んあらせ　ささ由屋んの何ろ不にあらん屋

紀来もしらせ

あさのさくそをおてなんの後いとる　後成島ち物に地神中宮代家史

史本日ん尊の兄の史蘭洋命のたりたりを云ゆまひて海中にもて取

て飯里と由ふ時海神の教にさ由しのろしきよを云けてしつ

里をうをこし後ゆにすけ之しゝ由へとありしを其をしへのゆく賀

尊の志く由へりしてしかりして人をの後ふとてもの我うしろへ屋りて

由へ見事あり其事をあらのさうゆをうつと云と後し由屋り

ちをもてぬ由し師説に海人のろきしに海底へ入時さうちまにあり

て入とてもなりて浪をうつくゆくへいきをもらんせて昔きさ也

業平の思ひ切なる事あさしのさうゆをうちて千尋の底に入

屋りに昔を云への後ひをるといそのへを切に恐を云也

むくつ書記　業平の我のろ事を同事とむくつ書記事といふ也如

ちうれ不あるゆゑなきをちく海りあふ事やあらんとおもていふ也此物

語物云へやしき事なる後ひへとも詞花に業を貌といふまでも折

のへくらんて其こゝにんを付へうもて他人の所好に志こうふへきん

第七 媛川のおほひまうちきん　勘物りこ経

平賀　媛川の昔の家の系にあり平賀と貞觀十七年也

中将　此時業平未と中将に付せて媛に極官を書るなりし

橘花　いくもうきなりてみぬやうにあまと今老の来るへき道の由ら

姫屋りにとゝ紀りうふと云の字にうれ此かへをり紀にりをてよ

めり後成の定家にも自紀により来まるう而白きと評せらまし也

百六 なるやゝる 高位即妙の高之 新田川は葉のちりしきるに波の雪にて
都は神代にもなる事いきうすと也神代には神変ふ都にあまた
とも其時もなる事いきうすとなり首尾相應言語道断
百七 おくがる男 がりひし也
其男のりとなりけるへ 葉平の妹也なる事也返事せしへ葉平
の孫ら其ふみゆると云事よみそく妹を言事さうしうると云義ハ
さなれと云ハ此所にてみしうす之
とし切 勅撰に後撰の巻頭の作者一切経をかきしへ
あまもおさしかしてみなとかく事を長せさうこ
言ハえよ面さうなきれ なまなとうしきこの義その言よう
一句ゝ面さうなりあらて
葉をうれて 敏行い言ゝ見ん事きい物しきさ面なる言ゝ面せそ
見おとさやしとて葉をうけるなるへ
つましの 都は面さ都方もなく此女を思わかしの海川は神の
見ひち 遠しも有しと
あさきこそ 後ミなきれそ神いぬるらんそまとのまんのまあ

らしとこ之ぬきしら返事れむと云源氏物語は贈答のなと云
神ぬるて点綴とうつれ志なるかゝ物ゝろ面これらうそこ
後ミまやへハ物ゝ川我方は身を角つけてかさ点詠を
男女をこせたり ちとんぬさうう見いけし女を我物にして後乃
まへ出れ又一句は見へきと競孝も申し也
我ミは 誠はさうを世ちおもれ須もあまれや問うこさと云ちまれ
んハ見えたまれ我身をさうる面は出り面さると云ふこと問うこく
なるとこんへ面ふてもいさぬ面しあしと云我なるなり
さしこれぬまて ひさくとなる程はめるも也
百八 風出けいとれにといとことはふと云心之ものけの字濁くらむ
也風出けれとれに波の源岩のよく風のふかぬるもわく波れてぬ
おりを有く常住風波りしめるて我神なりといふ
都おひかう 葉平は我身のよはさておひまる也
ら井ことに ら和ことにあらしを和とにといふ心なり和
なくは蛙う面を孫ふてなく田ゝ面ゝ小ゝ孫ちのハ面さ都やう
は都ゆる也蛙のきけらしきて和の面さる屋うは葉平は思れき

ちるすゑはなく　行平六十九歳の時さまい鷹飼似合ぬ事と
もとけたにけり　鷹飼の方堪能にて志つけうるを云しうる行幸
りしは却者を貴せしまゝ也
まりかきぬ　後撰のおとゝ紀に鶴のことをぬいてうきつけまうとあ
おきれさひ　おきれさひは只事なきこもしけい老のさまとしらう
といふんなり　行平のしろ此ゆ立わくまうをいつしうさ代
一夜の解(多術)の行幸なきとうやうにおきをくなるさうめそ今ハ
うりこそ鷹飼をもまへ　ゆきとも
御幸しきあうりけり　御門の御氣にあまり事あり也行平いわう幸
にあまり七年に及事をも給ひ事とも意しけ時御門五十七歳にて
おりしませしかふはうとそうしも吾にあはり
めしそ我身上の述懐をもしとも御の氣にあらう事なとをい
百六　斟酌をきす之一切の事にけしんつりひまつき
おきのゆく　古今にはの御の名は鄰にすゝかしは高に小野小町の意
百六　業平にわりまゝ申せしゆを此にすゝかく屋くしうも所きとも
波さしより　席前之久くなぬ見にまゝこそいたんとそ上句をとる

いうさまを波詠ゆへ　ゆう旋にまゝ縁もあるゆゑ思ひまゝ思ひ
まゝ濱にあり家をいふ　しと申ひ　板ひまゝしなといふ　おとし定
遊ゆ　遊上冬菊と云題にて　雲とらぬ　菊の名は濱ひまゝ　年く殆る
秋の白菊は　濱の家は　縁題の遊　文字落題にする也
師説にいふ　砂の下にけり　ゆうゆ　ゆとくなるを濱ひまゝと云也
何事もこれ　業平の作に何事もなくよくなるに安思へとおと侍
百七　馬上和連無紙筆　憑君侍諸平安のに
住吉に行幸　文徳天皇天安元年行幸といへども國史にも実
録にもみえて新古今にはの詞うきのおとく住吉に行幸あり時
とのせうまゝ何のけ門の行幸といへども又國史にも志るし落ちて
我こそも　姫松に小きれとは只事と云心姫りに
おもひ神　住吉いうしはにまてあり　是ゆつ神にて俗に吳郡
吳國の内の時擁護の神也住吉に勸請いたるかに後の
年なり和尚の道をもて細あつくまはり給つる也
百六　宰ぎ屋り　現形也　業平の女の事を寄信せしとも
今見寄りせて

卿となるは雅となるは詩とみくはへしかりそ絶ふしも直ちに雅
てよきもあらしと也精の字よりみるはいかるしかりの心應名著
百廿四 魂化為楚舞と飛入未央棲といふかたし
いかなるす何事をしらけるかや古注にそのこの義を云或云
言の大すなと云ふ悉ちふへし脱絅生にいかなるすをとらけるを
生をとるなるとしてしるへきや一切のす知音にあらさまいあらも
さぬ物と業平の存生するに何也云とも云へらを而を後より
なしたるへく何すを思すといふるとも猩骨といふへきか伯牙絃琴
すを引すたり 巻鎮和尚のおりふしとなと何人のなるるんあつけれ
明かし
夏氣に月をさやけきとよりしてよ絶り
清ぬるゆく 所なりしていたるといふ也 是則一切前生の辞世へ
して所なりふといふ也もしさうしとこるや 是則一切前生の辞世へ
かくといふ也 其ちきとも母なりしていおとらへかさらや大和物語にも
しき事をよりしてなんさてはくにはくにはくとうとうしき物語に業平の
姑絶をあくる程に元服の初より獲麟のタメまでにして之
そめにより京極黄門の常に見れ物ふ面をきに物は古今伴勢物語

とかきまゝ業平に元慶四年庚子五月廿八日九十六歳に
して卒を自然に高月正忌にあたまつり

右加一見老悚僻案之臆説不漏一年載而抄之拾必破竹
必瀉水却雖有恥來者儻同志者須潤色之名曰惟清
抄不可出窓外而已

重基